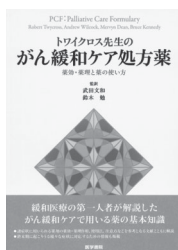


書評

〔評者〕
大石了三
九州大学名誉教授



トワイクロス先生の がん緩和ケア処方薬 薬効・薬理と薬の使い方

Twycross R, Wilcock A,
Dean M, Kennedy B 編
武田文和、鈴木 勉 監訳

●A5 頁752 2013年
定価 5,775 円(本体 5,500 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01521-9]医学書院刊

トワイクロス先生はオックスフォード大学の緩和ケア講座の初代主任教授で、長年の臨床経験に基づく先生の著書は緩和ケアの実践書として緩和ケアにかかわるすべての医療従事者のバイブルとなっている。今回、緩和ケアの実践経験豊富な日本緩和医療学会の認定薬剤師を中心として翻訳委員会が組織され、武田文和先生と鈴木勉先生の監訳のもとに『トワイクロス先生のがん緩和ケア処方薬—薬効・薬理と薬の使い方』が出版された。『がん緩和ケア処方薬』というタイトルであるが、取り上げられている薬物は鎮痛薬や中枢神経作用薬にとどまらず、緩和ケアにおいて用いられるほとんどの薬剤について、薬効分類ごとに必要な情報が網羅されている。基本的な薬理作用や薬物動態、副作用に加えて、緩和ケアで用いられる目的に対する根拠(エビデンス)までもが詳細に説明されており、まさに『緩和ケア臨床薬理学』の初めての書籍といえる。さらに、必要な臨床ガイドラインが簡単にまとめられていたり、特殊な処方や投与法についての説明が加えられており、かゆいところにも手が届く便利な書籍となっている。

がんの進行に伴うさまざまな症状に対する薬物療法では、治療に難渋するケースが極めて多く、経験的あるいは症例報告などをもとにいろいろな薬物が適応

外使用として使用されることが多い。また、その使用方法も添付文書の記載と異なることもある。しかし、そのような薬物の使い方についての書籍や総説はあまり見たことがない。それは、基礎および臨床のエビデンスの不十分さもあるが、適応外使用について責任をもって詳しく説明するのは躊躇されるという背景があるからであろう。本書では、緩和ケアで実践されている薬物治療について実によくまとめられており、これまで緩和ケアに専門的にかかわってきた人でも、改めてなるほどと納得させられる内容が数多く含まれていると思う。さらに、かなり細かいところまで触れてあり、緩和ケアにおけるさまざまな事態への対応を実践していくのに大いに参考になる書籍である。

ホスピスや緩和病棟が増えてきたとはいえまだまだ十分でなく、一般の病棟で緩和ケアにかかわる医療従事者も非常に多い。そのような方に対して、本書は一見図表が少なくとっつきにくい印象を与えるかもしれないが、何かの薬について少し読んでいただければ、緩和ケアにおける薬物療法の理解と実践に本当に役に立つ書籍であることがすぐにわかるはずである。これまで緩和ケアに従事してきた医療従事者にも、一度じっくり読んでいただければ新たな知識の習得ができ、より良い患者ケアの実践につながることは間違いない。